

発表タイトル	弥生時代前半期北部九州の集落・墓地空間構造の検討
発表者所属名	国際日本研究専攻
発表者氏名	宇佐美 智之

1. 研究の目的と対象

本格的な水田稲作農耕が定着したことで知られる弥生時代においては、主に西日本で、「大型拠点集落」と評されるような集落がつくられるようになるなど、特徴的な集落形成の動きが起こり、結果的に、集落規模・内容のバリエーションの拡大をみた。本研究では、北部九州地方を対象としてこの実態をより詳しく確認するとともに、特に弥生時代前半期に着目してマイクロ・マクロの集落・墓地空間様相の分析をおこない、そのような事態を生じさせることになった諸契機やプロセスの一端を理解することを目指した。

2. 方法

弥生時代前半期を、第1期（夜臼式—板付Ⅰ式）、第2期（板付Ⅱ式—須玖Ⅰ式）に区分したうえで（図1）、① 北部九州地方全域、② 福岡平野・早良平野（博多湾沿岸域）／筑後平野の一部範囲、という分析スケールを採用し、a) 集落立地の空間的傾向と、b) 集落・墓地の分布の空間的様相の変化を評価した。また、③ 比較的良好な調査資料のある集落・墓地に分析的をしぼり、c) より局所的な内部空間構成の特徴とその変化などを評価した。最終的に、これらの個別の結果を統合し、考察を加えた。

3. 分析結果とその検討

このような方法にもとづく分析の結果、弥生時代前半期の集落（居住集団）形成の基本的方向性などを把握するとともに、第1期以後、隣接集落相互が次第に景観的に可視化されていったことなどをきっかけとして、それが、集落（居住集団）の多様化・拡大化を目指すという別方向の動きへと変わり始めたことなどを理解した。

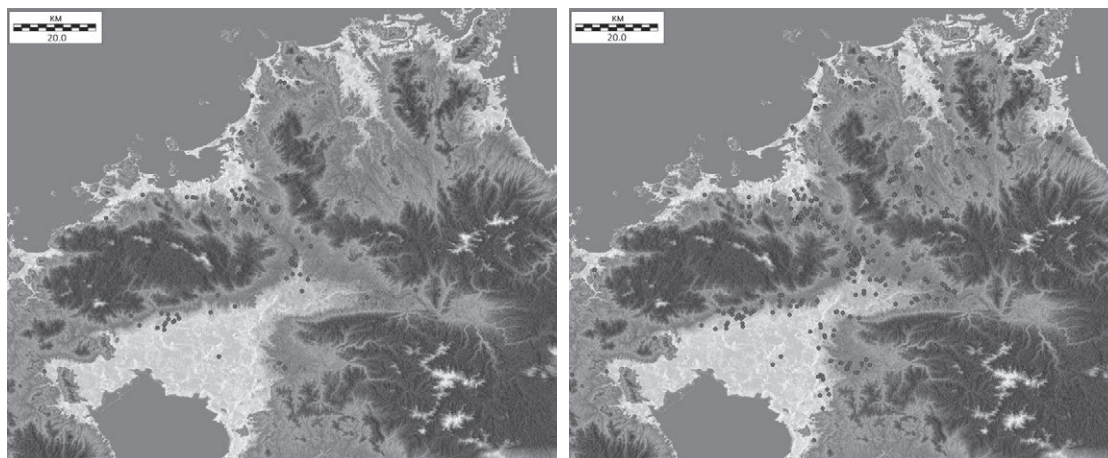


図1. 北部九州地方の弥生時代前半期の集落分布(第1期:左図, 第2期:右図)